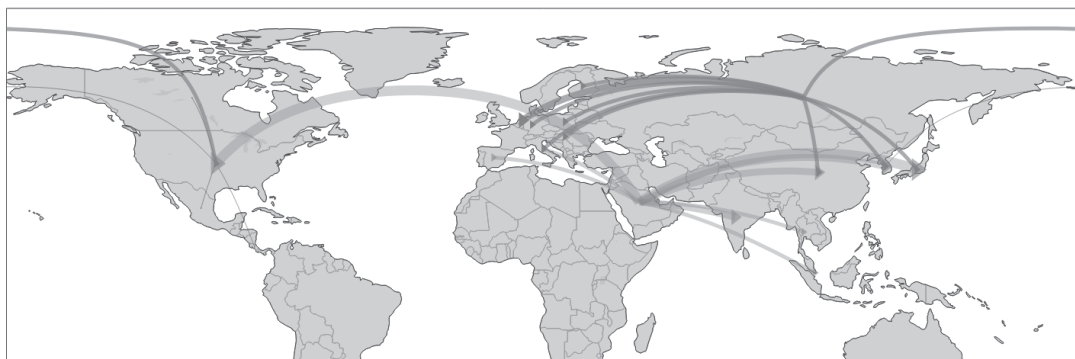


動くグラフで見る世界の原油輸出の変化

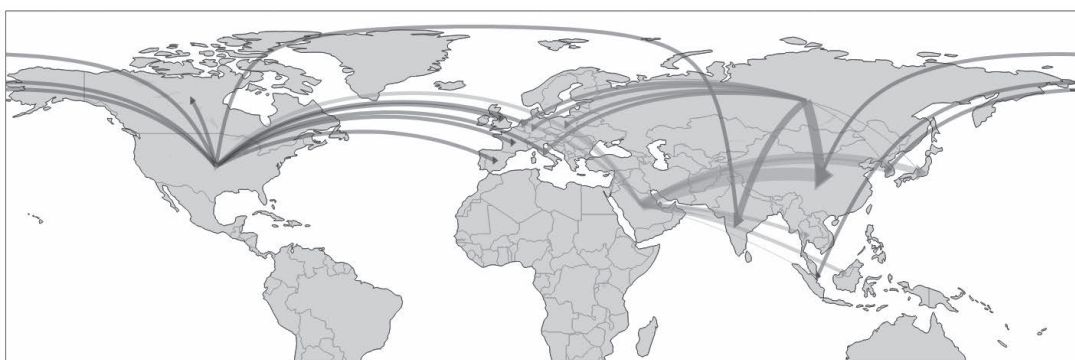
経済調査部 主任エコノミスト 阿原 健一郎(あはら けんいちろう)

資料 米国、サウジアラビア、ロシアの原油輸出量

2011年の米国、
サウジアラビア、
ロシアの原油輸出



2022年の米国、
サウジアラビア、
ロシアの原油輸出



(注) 図中の線分は、バレル/日の大きさに応じて幅を7つに分類。主な輸出先はUN Comtradeの石油・原油(HSコード2709)の輸出入データを参照。ロシアやサウジアラビア等、直近の原油の輸出先が確認できない一部の国は、世界各国の輸入から作成。1kg=0.006289blとして計算。
(出所) UN Comtradeより第一生命経済研究所作成

原油輸出国になった米国、原油輸出国であり続けるロシア

3月3日、石油輸出国機構(OPEC)とロシアなど非加盟産油国でつくる「OPECプラス」は、日量220万バレルの自主減産を第2四半期も延長することで合意しました。生産量を調整し、原油価格を下支えする狙いがあるとされています。原油から精製される石油は、エネルギーの多様化が進む今日でも、主力エネルギーの一つであることに変わりはなく、原油価格の動向は世界経済に大きな影響を及ぼします。

原油の需給には、この10年ほどで幾つか目に見える変化が起きていました。資料は、2022年時点で原油輸出量の多いサウジアラビア、米国、ロシアについて、主な輸出先と輸出量を遡って示したものです。サウジアラビアの輸出量が多いことは今も昔も変わりません。大きく変化したのは米国です。以前は石油の輸入国でしたが、2000年代後半のシェール革命により、原油の生産が急増し、2020年には原油の純輸出国となりました。2020年以降は、新型コロナウイルスやシェール企業の株主還元の動き、バイデン政権による脱炭素化政策の推進により、生産は大きく増加していませんでしたが、2024年の大統領選で、脱炭素化政策に批判的なトランプ氏が大統領に返り咲いた場合、原油の増産につながっていく可能性があります。

一方、ロシアは、ウクライナ侵攻に伴う西側諸国の経済制裁によって、ロシア産原油に価格上限設定が課される等、原油取引を大きく制限されていました。ただ、グラフを確認すると、制裁に加わっていない中国やインド向けの輸出を増加させており、引き続き、原油輸出国であり続けていることがわかります。

(実際のグラフは、上記のQRコード、または<https://www.dlri.co.jp/report/dlri/graph202404.html>からご参照ください)
※QRコードはデンソーウェーブの登録商標です。